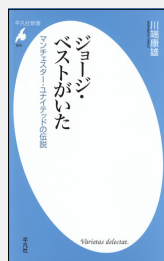


川端康雄 著

『ジョージ・ベストがいた
——マンチェスター・ユナイテッド
の伝説』（「平凡社新書」524）



St George from Northern Ireland

英文学者が、一般読者に向けてサッカー選手の評伝を書く。英国の強豪、マンチェスター・ユナイテッドの往年の名選手の名前に惹かれて書店で本書を手に取り、著者がジョージ・オーウェルの研究者であると知って驚いた読者も少なくないのではなかろうか。一昔前の英文学者、およびその著書とはずいぶんイメージがちがう。著者はジョージ・ベストについて、「従来の『マッジョ』なサッカー選手の定型からまったく外れ」、これまでの「サッカーファンの範囲を超え」る支持を集めたと記しているが、およそ「英文学」という範疇には収まりそうにない本書自体がまさにベストその人のようであり、現役時代の彼のプレイを知らない世代を含め、幅広い層の読者へと訴えかける魅力を持っている。

あとがきによれば、本書はもともと 20 世紀後半の英国文化

史を講ずる教科書の一部として構想されたものらしい。ひとりのサッカー選手の人生を通して、ある時代の文化状況を語るなど、突拍子もない思いつきに聞こえるかもしれないが、その選手がジョージ・ベストとなれば話は別だ。華麗なプレイスタイルと人目を引く長髪から「5 人目のビートルズ」と呼ばれたベストは、1960 年代の若者文化を象徴するポップスターのひとりであったうえ、ベルファスト生まれの彼には、この時代の後半から深刻化する北アイルランド問題の影もつきまとう。いわゆる the Swinging Sixties の明暗両面へと分け入る格好の入口を、著者はこの傑出したドリブラーに見出したのである。

とは言え、本書の最大の魅力はやはり、そのような 1960 年代英国の社会背景の説明よりも、生き生きと描き出されるジョージ・ベストのグラウンドの上での活躍の方にある。おそらく執筆にあたって、著者は当時の試合の映像を何度もくり返し確認したのだろう。試合中、ベストがピッチのどの位置で味方からのパスを受け、ドリブルでどのように相手ディフェンダーをかわし、左右どちらの足でゴールのどのあたりへシュートを決めたかが、紙上に克明に再現されるのである。こうした平明にして精確な筆致は、サッカーという競技に対する著者の深い理解と愛情に裏打ちされたものにちがいない。ベストのサッカー選手としての力量、著者の言葉を借りれば、「審美的とでも称すべき純粋な快楽を観客に与える」能力を読者にあますところなく伝えている。

サッカー選手の評伝である以上、本書には当然このような試合ごとのベストのプレイの詳細な描写がいくつも続くのだが、マンチェスター・ユナイテッドというサッカークラブの劇的な歴史、1958 年の飛行機事故で主力選手の多くを失いつつも、

その苦難を乗り越えて、事故から 10 年後の 1968 年、欧州カップ優勝という栄冠を手に入れるという強固なナラティブに支えられているため、記述が単調に感じられることはない。クラブの再建途上の 1963 年に入団したベストのキャリアは、欧州カップの決勝を制した夜に頂点を極め、その後は過度の飲酒と奔放な女性関係がたたって、クラブともども転落の途をたどってゆくという具合に手際よくまとめられ、彼の名前を初めて聞く読者にも全体像がつかみやすい評伝に仕上がっている。

ただ、惜しむらくは、ジョージ・ベストの波乱に富んだ生涯を手際よく新書に盛り込むため、欧州カップの試合の記述に力点を置いた結果、国内リーグの他の強豪クラブへの言及が限られたものになっていることだろう。なかでも、ベストと同じくベルファスト出身のダニー・ブランチフラワーを主将に擁し、1961 年、20 世紀に入って初めてリーグ優勝と FA 杯制覇の 2 冠を達成したクラブ、トットナム・ホットスパーについてはもう少しページが割かれてしかるべきと思うのだが、これは評者の「党派」的偏見だろうか。(平凡社、2010 年 5 月、新書判 264 頁、740 円)

——谷岡 健彦 (東京工業大学准教授)